

大学史ニュース

第18号

2020年2月15日 発行

目次

調査報告

◇政治家・秋田清の銅像…………… 3

資料紹介

◇初代駅伝監督・丸三郎の木製メガホン…………… 4

◇学祖扁額の寄贈について…………… 5



「創立前史：日本法律学校への道のり」の展示コーナー

文理学部資料館で大学史展示を開催

令和元（2019）年10月4日、日本大学は創立130周年を迎えました。その日を挟む9月23日～10月18日、日本大学文理学部・日本大学文理学部資料館主催、日本大学企画広報部共催で、令和元年度日本大学文理学部資料館展示会「日本大学130年の軌跡—明治から令和へ—」が開催されました。

同資料館では、これまでも文理学部史や学祖山田顕義をテーマにした展示会は開催されましたが、日本大学の通史を主題とした展示は今回が初めてで、10月5日には当課課員によるギャラリートークも行われました（12日の2回目は台風による休館のため中止）。開催日数22日間の入場者数は、630人でした。



開催初日の資料館入口

文理学部資料館展示会「日本大学130年の軌跡—明治から令和へ—」



「VI・VII 新制大学期①②」の展示コーナー

前頁の詳細を紹介します。原物資料はすべて学内の所蔵ですが、文理学部と企画広報部の資料に加えて、学務部学務課・同国際交流課・日本大学図書館法學部分館からも出展していただきました。また、パネルなどに使用した写真は、校友及びその関係者や学外の諸機関からも提供していただきました。

展示は「I 創立前史：日本法律学校への道のり」「II 日本法律学校期：日本法学の提唱」「III 専門学校令期：私立日本大学の誕生」「IV 旧制大学期①：総合大学への道」「V 旧制大学期②：戦時下の大学」「VI 新制大学期①：総合大学としての発展」「VII 新制大学期②：

グローバル化時代に向けて」「VIII 世田谷キャンパスのあゆみ：大学予科～教養部～文理学部」の八つに分け、コーナーごとに年表を掲げました。

Iでは、山田顕義や創立者たちに関する日本法律学校創立以前の資料を展示し、IとIIをつなぐ導線には、「山田顕義墓所発掘調査」に関する展示ケースを設けました。II～VIIは、130年の通史を高等教育機関としての制度上の変遷に沿って区分し、展示内容を組み立てました。

IIでは、本誌第6号で紹介した山田顕義から創立者の一人となる上條慎蔵に宛てた、明治22年7月24日付の書簡（上條信也氏所蔵）のレプリカを展示しました。IIIでは第3代総長山岡萬之助（日本大学からの留学生第1号）のドイツ留学に関する資料、IVでは関東大震災からの復興や学校教練関係、Vでは学徒勤労動員や出征関係の資料などを展示しました。

新制大学期となるVIでは、通信教育部・短期大学部も含めた新制大学設置や創立60周年（昭和24年）・70周年などに関する資料、VIIは、創立100周年

（平成元年）に始まり創立130周年記念事業で締めくく

りました。VIIIは、現在の文理学部キャンパスに設置されていた、教育組織の変遷をたどる資料を展示しました。

今回、文理学部資料館との共催で、通史を概観した展示会を開催し、多くの方々に日本大学の歴史に触れていただくことができました。関係者一同に御礼申し上げます。

（高橋）



展示会ポスター



ギャラリートーク（撮影：文理学部資料館）

政治家・秋田清の銅像

日本大学は、戦前から中央政界で活躍した人物を輩出していますが、徳島県出身の政治家秋田清もその一人です。秋田は、三好郡^{あしろう}足代村（現三好郡東みよし町）の出身で、その近くには、昭和37（1962）年に「秋田清先生銅像建設期成同盟会」によって銅像が建立されています。初代総長松岡康毅の生誕地（板野郡上板町）から吉野川を遡った場所にあり、平成29（2017）年3月に調査を行いました。



秋田清の顕彰碑

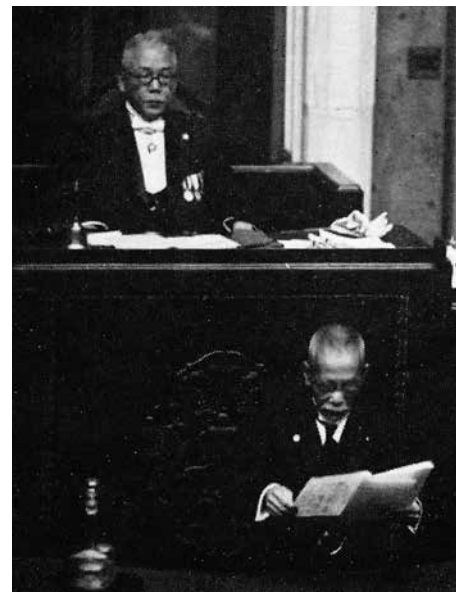
銅像は、吉野川に架けられた三好大橋の付近にあり、燕尾服を着用し帽子を手にしています。製作は徳島県出身の彫刻家児島正典によるもので、台座の銘「秋田清先生之像」は、当時徳島県知事であった原菊太郎の筆です。傍らには「故正三位勲一等秋田清先生之碑」（顕彰碑）があり、秋田の事績が刻まれています。以下、この碑文を中心に秋田の経歴について述べます。

秋田は、明治14（1881）年に生まれ、31年政治家を志して上京しました。翌年東京法学院（現中央大学）に入学、1学年終了後に日本法律学校の3学年に編入しました。34年に卒業後、判事検事登用試験第一次試験を受験し弱冠20歳にして合格、徳島区裁判所検事代理となりました。36年には第二次試験に合格し、高知区裁判所判事に補せられましたが、直後に退官し二六新報社に入社、編集長を経て44（1911）年に社長に就任しました。翌年、徳島県より衆議院議員に当選し、以来、昭和17（1942）年まで10回の当選を果たしています。大正11（1922）年に犬養毅の立憲国民党に入党し、その後犬養とともに政友会に合流しました。昭和2（1927）年に田中義一内閣の通信政務次官、翌年内務政務次官、7年に衆議院議長、14年には阿部信行内閣の厚生大臣、15年には第二次近衛文麿内閣の拓務大臣に就任しています。衆議院議長は日本大学出身者としては最初であり、國務大臣は松田源治に次いで2人目です。

秋田は、軍国主義の高まりのなかで、政党政治を維持するために尽瘁し、太平洋戦争末期には時局収拾のため訪ソを画策するなど、国難の打開に当たっています。昭和19（1944）年12月に日本の前途を憂いつつ亡くなりました。享年63歳。



秋田清の銅像



衆議院議長席の秋田清（上）と犬養毅首相
昭和7年3月
（秋田清伝記刊行会編『秋田清』より）

（小松）

【参考文献】秋田清伝記刊行会編『秋田清』（昭和44年刊）

初代駅伝監督・丸三郎の木製メガホン



2連覇時の記念写真（第17回大会）2列目中央が丸監督
（森本家所蔵）

丸が入学資格に制限のない別科生であったからと言われていています（黒田圭助『箱根駅伝小史』第1編）。あるいは夜間部に在籍していたためかも知れません。当時夜間部に在籍する生徒・学生は、新聞や牛乳配達など足を使う仕事に携わる人が多かったことから、箱根駅伝に出場が認められなくなったためです（関東学生陸上競技連盟編『箱根駅伝70年史』）。選手としての出場は適いませんでしたが、駅伝が好きであった丸は、在学中から箱根駅伝に出場する選手のコーチを行っていたようです。

日本大学が箱根駅伝に初出場したのは、大正11（1922）年の第3回大会で、参加10校中最下位でした。その後しばらくは低迷状態が続きましたが、選手のためまざる努力により、昭和3（1928）年の第9回大会で総合3位になりました。丸は昭和3年に専門部法律科を卒業しましたが、この頃に監督に就任しました。また、昭和5年に日本大学第二中学校（現日本大学第二高等学校）の寄宿舎を陸上競技部の合宿所として譲り受け、ともに生活することで選手間に団結が強まり、加えて丸の厳格な指導のもと、練習も規則的に行われるようになり、箱根駅伝の成績が向上しました。



箱根駅伝史上初の3連覇（第18回大会）
復路ゴールの鈴木勇選手

このほど、元日本大学駅伝コーチ・陸上競技部監督の水田信道氏から、初代駅伝監督の丸三郎が、雨や雪の日に使用していたと言われる木製メガホンを寄贈していただきました。日本大学の箱根駅伝初優勝を導いた丸の貴重な遺品です。水田氏によると、駅伝コーチを務めていた昭和35（1960）年頃に丸自身から直接授かったとのことでした。

丸は、大正14（1925）年に大成中学（現大成高等学校）から、日本大学専門部法律科に入学しました。10,000mの大正13年度中学校記録保持者で、日本大学入学1年目にして全日本陸上競技選手権のマラソンで優勝しています。しかし、丸は箱根駅伝には出場していません。詳しいことは調査中ですが、



丸監督が使用した木製メガホン

そして、第16回大会（昭和10年）で参加14年目にして悲願の初優勝を果たすと、第19回大会（昭和13年）まで4連覇を達成しました。丸は、連覇の秘訣について、「日大スピリットと団結力」であると述べていますが、このメガホンから丸の掛け声が聞こえてくるようです。

（小松）

学祖扁額の寄贈について



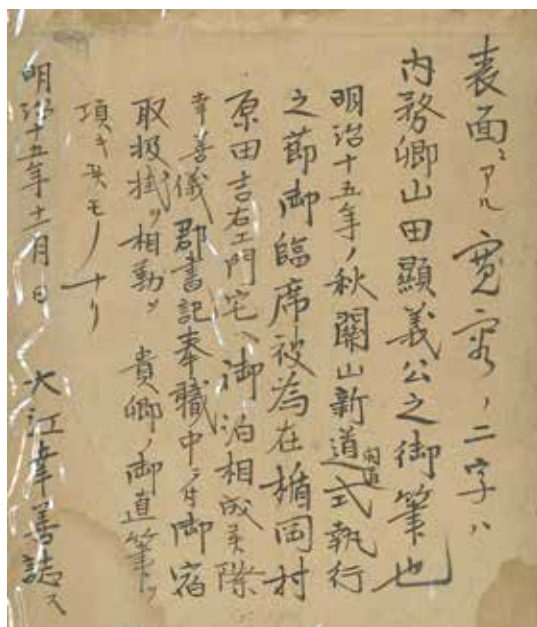
令和元年11月、大田区在住の大江順子氏より学祖山田顕義の扁額が寄贈されました。扁額には「寛容」の2文字と「空齋居士」という顕義の署名が記されています。扁額の情報だけでは、どのような経緯で大江家に伝わったのかわかりませんが、先祖の方が記した由来書によってその経緯がわかりました（下部写真）。

大江家は山形県寒河江市の慈恩寺で代々修験をしていた家系で、明治に入り、大江幸善氏は郡役所の書記を勤めていました。明治15（1882）年11月、関山新道の開道式が執り行われ、当時内務卿であった山田顕義が参列しました。関山新道は、宮城県と山形県を結ぶルートで、野蒜港^{のびる}の建設とともに山形県に物資を運ぶ道路として開通が計画されました。顕義は開通式後に近くの楯岡村（現山形県村山市）に宿泊しますが、この時に宿泊の手配などをしたのが郡書記であった大江幸善氏で、その際に直接、顕義から頂いた書であることが由来書に記されています。

明治15年11月4日付の『山形新聞』には、「去る一日は関山新道の開道式にして内務卿山田顕義公は野蒜港突堤式に臨まれし、序でに同所に廻^{まわら}車れて右開道式を執行せられたる由」と記されていることから、大江幸善氏が山田顕義に書の揮毫を依頼したのは、11月1日前後ということがわかります。顕義の扁額や掛軸は数多く残されていますが、執筆時期が特定できるものはそれほど多くはないので、またひとつ貴重な資料情報を確認することができました。

そして、今回寄贈いただいた資料は、かつて日本大学山形高等学校に勤務されていた小形利彦先生から情報提供をいただいた前掲『山形新聞』の学祖関連記事と繋がる情報となりました。また、本誌第10号で田淵が紹介した、明治15年10月27日に開催された岩手県北上市と秋田県横手市を結ぶ平和街道開通式に出席した後の学祖山田顕義の動向を示す資料となりました。

これにより、明治15年9月に始まった顕義の北海道視察の帰路は、岩手県の平和街道開通式（10月27日）、宮城県の野蒜港突堤式（10月31日）、山形県の関山新道開通式（11月1日）、福島県の安積疎水視察の後に11月9日に帰京という経路であったことが判明しました。今後も内務卿時代の山田顕義の動向を調べていきたいと思えます。資料をご寄贈いただきました大江順子様にご礼申し上げます。（松原）



【参考文献】小形利彦『～来形一四〇年～ 山形県初代県令三島通庸とその周辺』（平成25年、大風出版）

企画展『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる—について



令和元（2019）年10月12日から令和2年2月22日まで、立教学院展示館で企画展『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる—が開催されました。この企画展は全国大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念として、西日本部会、長谷川町子美術館、大学基準協会の協力を得て開催されました。令和元年は新制大学発足から数えて70年となる節目の年で、これに合わせて今回は新制大学誕生に光を当てた企画展となりました。

入口を入ってすぐに、大学生に関する「サザエさん」の4コマ漫画が掲示されているのが印象的です。展示は旧制度の大学から始まり、新制大学の発足とその当時の学生生活や社会との関わり、さらにはその後の高度経済成長期の大学の大衆化についてなど、6項目に分かれて展示されています。また、窓面には新制大学発足頃の学生生活や街並み、女子学生などの画像が映写され、映像コンテンツでは、講談師による新制大学発足頃の経緯がわかり易く紹介されました。

当課からは、新制大学発足当時の写真データとともに、古橋廣之進らが活躍した全米水上選手権（1949年）の写真アルバムと、戦後、大学基準協会、私学団体総連合会で活動した加藤一雄の関係資料を出展いたしました。

一つの大学の資料だと見えてこない、新制大学期の多様性を感じ取ることができる企画展でした。実行委員の方々と会場の提供及び展示企画全般にご尽力いただいた立教学院展示館の皆様にご礼申し上げます。



『写真でみる日本大学の130年』を刊行しました

令和元（2019）年10月4日、帝国ホテルで日本大学130周年記念式典が開催されました。これに合わせて当課では、『写真でみる日本大学の130年』を刊行いたしました。学祖・創立者が誕生した江戸後期から現在に至る日本大学のあゆみについて、写真・資料を多用した「目で見る年表」形式として編集しました。

編集を進めてみると、当課が所蔵する写真の時期が偏っていることがあらためてわかりました。今後は、当課に所蔵されていない時期を中心に、さらに写真資料の収集を進めていきたいと思っております。



全国大学史資料協議会2019年度総会・全国研究会



研究会後の総括討論

用一②」をテーマに、①昭和23年に認可の大学（同志社大学・日本女子大学）、②女子大学（日本女子大学）、③旧制大学を母体としない地方国立大学（富山大学）の3事例の報告があり、総括討論では新たな課題も提示されました。

3日目は、日本女子大学と学習院大学の展示施設とともに、学内に残る有形文化財などの見学が実施されました。

令和元（2019）年10月16日～18日、立教大学池袋キャンパスで開催されました。昨年は昭和24（1949）年の新制大学発足から70周年に当たり、初日は、東京大学・桜美林大学・立教大学名誉教授寺崎昌男氏の新制大学生誕に関する講演の後、立教学院展示館の企画展「『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる—」（6頁参照）を見学しました。

2日目の全国研究会は、「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—



学習院大学キャンパスの乃木館（旧総務部）
国登録有形文化財
乃木希典が院長時代に起居した

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（安曇野）大会及び研修会



視察で訪れた貞享義民記念館

による公開講演会などがありました。

今年度の大会テーマは、「『文書館（ぶんしょかん）』をつくる～市町村が拓くアーカイブズ活動～」で、研修会・研究会では、近年、安曇野市文書館を含め、自治体による文書館設置が続く長野県内の事例を中心とした報告があり、討論会では、文書館未設置の自治体関係者から、設置へ向けての環境づくりなどに関する質問や意見も出されていました。

令和元（2019）年11月14日・15日に安曇野市豊科公民館を会場に開催されました。初日午前中の視察（研修会A）は3コースあり、「貞享義民記念館」「安曇野市文書館」「安曇野市豊科郷土博物館」を訪れる「安曇野コース」に参加しました。昨年10月に開館したばかりの「安曇野市文書館」の視察では、資料整理や展示普及活動への取り組み方などが、業務の参考となりました。

午後は、独立行政法人国立公文書館館長加藤丈夫氏



2日目午後の大会テーマ討論会

※令和元年12月、事務室が所沢から市ヶ谷に移転しました。

(移転先) 〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 日本大学会館 8階
日本大学企画広報部広報課 (大学史編纂) E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

活動報告

令和元年 6月～令和元年 12月

(大学史に関する活動)

○調査研究等

6月5日 全史料協総会 (東京都豊島区: 学習院大学)
10月16日～18日 全国大学史資料協議会総会・全国研究会 (東京都豊島区: 立教大学 他)
11月14日～15日 全史料協全国大会 (長野県安曇野市: 豊科公民館)

○展示

7月～10月 創立50周年と50年 (日本大学会館 2階)
9月～10月 令和元年度日本大学文理学部資料館展示会
「日本大学130年の軌跡—明治から令和へ—」(同資料館)
文理学部・同資料館と企画広報部の共催展示

11月～1月 昭和20年代の文化活動 (日本大学会館 2階)
11月1日 大学史常設展示コーナー開設 (日本大学会館 2階)
11月1日 全国校友大会での大学史展示 (東京ドームホテル)

○講演・報告

6月18日 日本大学スポーツ科学部 大学史講演 (三軒茶屋キャンパス 1号館)
6月25日 日本大学スポーツ科学部 大学史講演 (三軒茶屋キャンパス 1号館)
10月18日 日本大学中学校 学祖講演 (同校さくらホール)
11月16日 日本大学法学部 ホームカミングデーでの学祖講演 (本館大講堂)
11月29日 日本大学法学部 「学祖山田顕義ゆかりの地」視察会 (護国寺など)
12月11日 高等学校・中学校等教員採用内定者オリエンテーション
「付属高等学校等の歴史について」(日本大学会館)

日本大学大学史ニュース

第18号

2020年2月15日 発行

編集・発行 日本大学企画広報部広報課
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24
TEL 03-5275-8444 FAX 03-5275-8094

印刷 株式会社 日本大学事業部